

バゴ研修センターの成り立ち

渡辺所長発表分全文：

フィリピン・ネグロス島バゴ研修センターの渡辺です。

いつもオイスカを、そしてオイスカプロジェクトをご支援いただき、本当にありがとうございます。

今年は、先ほども触れられたようにネグロスで最初のプロジェクトがスタートして50年目。そしてバゴ研修センターはちょうど40年になります。1971年古川さんは家族5人で東ネグロス州のカンラオンというところに赴任しました。カンラオン市はネグロスの中央に位置し、2465mのカンラオン火山と千年の樹齢と言われるアコウの木で有名なところです。

フィリピンにオイスカを紹介した人は、ネグロス島出身のトロツバさんという方です。

この方の知り合いのボージスタさんの息子さんが、1966年に初めてのフィリピンからの研修生として訪日しました。

このベルニという名前ですけど、研修を終えてカンラオンに帰った後、オイスカに市の農業開発をお願いしようとなって、福岡でベルニを一生懸命世話された古川さんがカンラオンに赴任されたわけです。当時、フィリピンのマルコス大統領は稲作、トウモロコシの主要作物増産に大変力を入れていました。

古川さんは1年目、2年目と大変苦勞していましたが、2年目の終わりのころ1ヘクタールで234かばんという大変な稲作収量を達成され、これは一旦あたり12表近くになります。そしてオイスカの日本人が素晴らしい稲作の成績を上げたということは、カンラオンだけでなく、ネグロス中で大変な評判となり、オイスカにぜひ指導してもらいたい、ぜひプロジェクトをつくってほしいというリクエストが来たわけです。

岡村団長が新しい稲作プロジェクトを南のバヤワンというところでスタートされ、私がミンダナオから移って岡村団長のアシスタントになったわけです。その後、西ネグロスでもオイスカ農業プロジェクトという話が出て、バゴ市にモデルファームを開設しました。それが40年前のことです。

当時は、農業プロジェクトを採算が合うように実践・経営するというのがオイスカの方針で

した。日本から色んなものを持ち込まなくても現地でやりくりするということです。ですから、私もそのような目標を達成するように必死で農業に取り組みました。まだ私も若かったですから、周囲では日本から来た若いのが何ができるんだろう？という風に見られておりました。ですから、すべて必死に取り組みました。堆肥や燻炭づくり、現地にとってはよほど珍しいことでした。稲作、野菜栽培、養鶏・養豚、アヒルを飼ってアヒルの卵の塩漬け、キュウリのピクルスなどをつくって売って、農場の採算が合うように飛び回っていました。

このころは、本当に必死に動いていたという大変な時期でした。そのうち、そういった姿を周囲の人たちが認めてくれたのが、バゴ市の市立大学の農学部やあるいは周囲のハイスクールの農業科からの指導の要請もくるようになりました。そのころ、強い台風でいままでつくった施設が台風ですべてやられてしまうというような大変なできごと、私にとって一番大きな台風でした。84年9月2日のころでした。そのあと、それなりに回復してやりくりしていましたが、日本からもオイスカの熱帯農業研修生やらオイスカ高校からも少しずつ訪問者が来るようになりました。宿泊施設がないものですから、市にお願いして、市の宿泊施設に泊めてもらえるようなことをしていました。

そんなときオイスカのバゴ研修センターを応援しようと静岡の方たちが来てくださって、バゴの研修センターをつくって、大きな支援をしてくださいました。その時以来、オイスカモデルファームがバゴ研修センターと名前を変えたわけです。

そしてバゴ研修センターが今日まで続いております。

中川：渡辺所長。貴重なお話ありがとうございます。

バゴ研修センターが開所されるまでは様々な苦労も多かったと思いますが、渡辺所長が特に苦労されたと思う出来事は何ですか。

養蚕事業について

やっぱりあれ、そんなに日本での農業経験が多くないですから、農業の技術的に恥ずかしくないよう農業の生産物を農業の収穫量を上げなくてはいけないと必死でしたね。そして若かったものですから、いろいろな経験不足で周囲とのコミュニケーションや年配の方々が言われることにどう対処していこうか戸惑いました。

中川：ここからは養蚕事業に関するお話をお願いします。

そのころ、山手のほうにでもですね、何かサトウキビに代わるものというようなかたちで

クエストがありましたので、まず日本ではうんと養蚕が盛んな時があつて、うんとそれが農家の収入になっていたといわれる人があつて。「養蚕をやってみたら、まず桑を植えてみたら？」という勧めがありました。私自身も養蚕というのは自分も山村育ちですので、小学生のころお蚕さんを見たり、触ったりしたことがあります。しかし、どうやって繭になるのか詳細はわかりませんでした。日本の先生方に教わりながら、また時に指導に直接来てくださったり、特に長野からの宮澤先生や山梨からの養蚕の専門家の芦沢さん、以来ずっと毎年のように来ていただいておりますが、いろいろと教えていただきましたし、また(研修生を)日本の養蚕農家に送って研修をさせていただいたりして、なんとかスタートしたわけです。

お蚕さんは桑を食べさせていけば繭になるんですけども、一番の問題は病気でした。最初は病原菌のないところで新しくスタートしますから、ほとんど病気になりません。ですけど、何回かやるうちにお蚕さんが病気になって、溶けてしまうような脳病というような病気とかいろいろなほかの病気も入ってきます。ですから、どうやって農家に話して、病気を止めるような飼育方をするのかということをお話していききましたけど、今まで、炭を焼いたり、サトウキビ農園で刈り取り仕事に出稼ぎにっていた農家に関しては、なかなか理解してもらえませんでした。お蚕さんの飼育槽をきれいに洗って消毒する。

桑を与える前には手をきれいに洗って、お蚕さんに桑の葉をあげる。そしてお蚕さんの部屋に入る前には土足ではいけないと、色々説明しても、なかなか説明してもらえない。また病気を出してしまう。「もう儲からないから辞める。」とどうとう農家が言い出す。本当に困ってスタッフやスタッフと一緒に研修生も一緒になって、一遍農家に泊まり込みでいって、一緒に飼育をやって、農家によく話して教えておいでということでスタッフや研修生も頑張つて農家に泊まりがけでいって、そしてやっと、いまいう農家に喜んでもらうというような(泊まり込み指導を)、今でもときにやっています。スタッフ達も日本で研修を受けたものですから本当に良く指導してやってくれます。そしてネグロスである程度、養蚕ができてきたもので、ルソンやミンダナオ、そしてとなりのパナイ島でも養蚕をやってみようということになって、2年前から日本政府の支援を受けて桑づくりから始まっております。隣のパナイ島での先週は200kg近い繭の生産があつて、本当に繭をつくった人達、そして繊維関係の人達も喜んでくれました。これがさらにルソンでもミンダナオでも広がっていくと本当にネグロスで今までやった経験を皆さんに分ち合いながら皆さんにやっていけたらと思っております。

そして、できた生糸から絹製品をつくったりしていけたらと思っております。本当にここまでの間に日本の農家の昔養蚕をやつて大事にお蚕さんの道具を大事に保存しておられた人たちがネグロスへそういった蚕具を寄贈してくださったり、そしてフィリピンではシル

クが珍しいですから、色んな国の大臣や養蚕のときは大統領自身が見に来てくださったり、そういった製品が取り上げられたりして、本当に養蚕をやっている良かったなという風に思っております。

もっともっと日本での養蚕の最高技術をこちらでしっかりと実践できるような形で、ネグロスで、そしてフィリピンの養蚕を広めていくような形で頑張っていきたいと思っております。このような形でオンラインでいろいろなことができるようになったわけですが、うちの若いことたちがこういったこともいろいろと教えてくれたりしますので、もっともっとこういう形でフィリピンの中で養蚕のセンターの中心的存在になるよう、そしてできたシルク製品も普及を頑張っていきたいと思っております。

私の拙い話ですが、聞いてくださって、ありがとうございました。本当にオンラインでこのような機会を与えてくださって、ありがとうございました。